みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

ミクロネシア標本資料の歴史的文脈化と文化遺産としての継承＜基幹研究：ミクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築：20世紀前半収集資料を中心として＞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2021-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 勲男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009847

ミクロネシア標本資料の歴史的文脈化と文化遺産としての継承

文・写真　林 勲男

染木煦のアトリエ

2018年春、画家・染木煦（そめき あつし）の遺族の代理人から1通の手紙が民博に届いた。民博には、東京の保谷にあった日本民族学協会附属民族学博物館（旧保谷民博）がかつて所蔵し、文部省史料館（現・国文学研究資料館）を経て移管された民族誌標本資料（以下、標本資料）が存在している。そのなかに、染木がミクロネシアで収集した300点余りの資料も含まれている。手紙は、染木による収集資料と関連する絵画や写真などが、彼のアトリエに残されているとの内容であった。同年6月、大阪北部地震によって大きな被害を受けたことで、民博が休館を余儀なくされていたなか、私は東京都立川市にある染木のアトリエを本館企画課標本資料係長（当時）の西澤昌樹と共に訪ね、ご遺族たちにお会いした。

染木は、1934年に旧南洋群島（現在の北マリアナ諸島・パラオ・マーシャル諸島・ミクロネシア連邦）のほぼ全域を7か月間に渡って旅行し、多くのスケッチや油彩画を描くとともに、現地の人びとの生活具を数多く収集し、民族誌学的調査もおこなった（染木 1945）。アトリエに残されていたのは、玄関外側の装飾に使われている彫像を含めて5点で、絵画もミクロネシア関連として事前に選定していただいていたものは10点ほどであった。それらに加えて、スケッチブックや自ら撮影した写真や現地で買い求めた写真絵葉書を収めたアルバムなど、彼の巡行の軌跡をたどる重要な品々が残されていることを確認した。

日本人による南洋貿易を目指してのミクロネシアへの進出は、すでに明治20年代から始まっており、第1次世界大戦終了後、日本による旧ドイツ領の委任統治が国際連盟によって認められ、1922年にパラオのコロールに南洋庁本庁が設置された（小林 2019）。南洋貿易で最も古い会社である南島商会の設立者が、染木の外叔父である田口卯吉であったことや、その田口の書いた『南島巡航記』（経済新聞社、1893年）を読んだことが、染木を南洋へといざなったとも言われている。日本は1933年に国際連盟を脱退したが、翌年の1934年から太平洋戦争が始まるまでの間に、染木以外にも川端龍子・布施信太郎・和田香苗・赤松俊子（丸木俊）・西尾善積（よしずみ）などの多くの芸術家たちが南洋群島を訪れ、作品を描いている（町田市立国際版画美術館・東京新聞編 2008）。

アトリエに並ぶ染木煦の作品（2018年6月28日、東京都立川市）

データベース構築プロジェクト

民博が所蔵するミクロネシア関係の標本資料は1,917点あり、そのうちの903点は、創設間もない頃に、旧東京大学理学部人類学教室の資料（旧東大資料）を受け入れたもので、1915（大正4）年から1934（昭和9）年までの20年間に人類学教室で登録されたものである。また、400点は旧保谷民博からの資料である。すなわち、ミクロネシア標本資料の過半数は、20世紀前半に日本の統治下にあった「南洋群島」で収集されたものということになる。

官民による日本のミクロネシアへの進出という歴史的背景に照らして、民博が所蔵する標本資料の来歴を明らかにするとともに、これらの資料が現地でどのように作られ、使われていたか、さらにはソース・コミュニティにおいて当時の暮らしや道具に関していかなる知識として現在に伝わっているのかを明らかにする目的で、フォーラム型情報ミュージアムの1つとしてプロジェクトを立ち上げた。そして、対象をその後の収集も含めたすべてのミクロネシア関係資料とした。そして、このプロジェクトの遂行には、ミクロネシアの専門家の協力が不可欠であったため、三田牧（神戸学院大学）と三田貴（京都産業大学）に共同研究者と海外の研究協力者を推薦していただき、お二人を含めた体制で2年間の強化型プロジェクトとして発進した。

パンデミックの影響

1年目には共同研究員の三田貴・牧がパラオで調査を実施し、13名を対象に聞き取り調査を実施し、該当する標本資料に関する情報収集をおこなった。現地では写真は残ってい

林 勲男（はやし いさお）
国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授。専門はオセアニアの文化・社会および災害復興について社会人類学的研究。論文に The Role of the "Mediator" in Sustainable Preservation and Utilization of Disaster Remains: Report from the 2020 international Forum on Telling Live Lessons from Disasters. *Journal of Disaster Research* 16(2): 176-181（Ishihara, R. 共著 2021）、編著に『災害文化の継承と創造』（橋本裕之共編 臨川書店 2016年）などがある。

パラオの長老と通信しながら熟覧調査をおこなうベセベス氏（2020年2月14日、民博収蔵庫）

るが現物が失われてしまった資料もあり、民博所蔵の標本資料の重要性も指摘された。また、現地の研究協力者からは、パラオの文化遺産としての利活用について共同で検討することに意欲が示された。そして、パラオから招聘したバーナデット・ベセベス（パラオ保全協会）が、データベースからあらかじめ選定していた標本資料を収蔵庫で熟覧調査した。この時の熟覧では、現地の年長者の見識が必要な場合、スマートフォンを使って、標本資料の動画を送って情報を求めるということもおこなった。鼈甲製の皿など現地ではかなり貴重な資料があることも判明した。

この招聘が2020年2月中旬であり、その翌月には三田貴が北マリアナ諸島での現地調査を予定していた。しかしながら、COVID-19の世界的な感染拡大により、各国とも入国時の隔離待機期間を設けたため、現地での実質的な調査期間や帰国後の本務への影響などを考慮して、渡航を断念せざるを得なかった。また、2年次に計画していたマーシャル諸島共和国とミクロネシア連邦での現地調査実施の準備として、調査で使用する資料を標本資料データベースから印刷して整えていたが、出入国における規制や島嶼国の医療事情への配慮から、渡航や民博への招聘を断念せざるを得なかった。

文献資料調査

染木についてはすでに書いたように、ミクロネシアの民族学的研究成果としての著書や『民族學研究』に発表した数編の論文などがあり、東大人類学教室からの資料を受け入れた際には、標本資料と共にさまざまな情報が記載された「内外土俗品圖集」や標本目録などが同時に民博に収蔵された。また民博所蔵の「杉浦健一アーカイブ」には、ミクロネシア諸島調査時のフィールドノート、メモ、草稿、地図など膨大な資料が含まれている。さらには「土方久功アーカイブ」の日記🔗やノート類はデジタル化され、民博の図書室で利用可能である。現地調査が不可能な状況で、民博が所蔵しているこうした文献資料との関連づけを可能な限り試みた。

たとえば、染木は著書のなかで、ヤルート島（現在のマーシャル諸島共和国ジャルート島）を訪れた時に、一人の老人から買い求めた海菊貝の首飾り（標本番号 H0024151）について、帰国後の研究成果も交えて書いているのだが、現地から妻に宛てた手紙には、この首飾りを予想外の安価で入手できた興奮を素直な言葉で綴っている。また、南洋庁のヤルート支庁嘱託であった田中雪次が同行していたことも書かれており、この時の収集の背景が垣間見られる。

今後の課題

フォーラム型情報ミュージアムの成果としてのデータベースは、けっして完成されたものが公開されるのではなく、多くの研究者やソース・コミュニティのメンバーからの情報の提供を得ながら、少しずつ完成に近づいていくものと理解している。今回取り扱った文献資料も詳細にわたって読み込んでいるわけではなく、また、権利処理の関係で現時点ではまだ公開できない情報もある。本プロジェクトによるデータベースに掲載された情報の修正・アップデートとともに重要なのは、現地調査の際に意見が出されたように、標本資料とそのデータベースを管理する民博および研究者が、ソース・コミュニティと共にこれらデータベースと個々のデータの利活用について十分に協議し、試行錯誤しながら実行する体制を整えていくことであろう。そのための人材と財源を確保していくことも当然求められている。これらが整備されて初めて、情報を提供する側のインセンティブが生まれるのではないかと考える。

引用文献

小林泉 2019「南洋群島と日本による委任統治」『島嶼研究ジャーナル』9(1): 6-27。
染木煦 1945『ミクロネシアの風土と民具』東京：彰考書院。
町田市立国際版画美術館・東京新聞編 2008『図録　美術家たちの「南洋群島」』東京：東京新聞。